

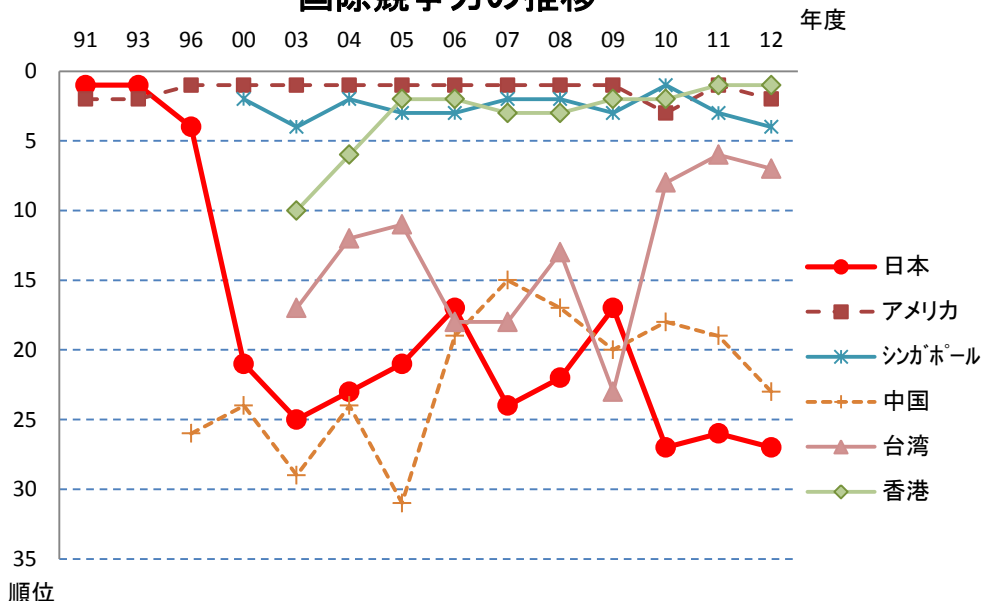
府立高校を取り巻く現状

- (1) 国際化・経済のグローバル化の進展
- (2) 格差の増大と固定化
- (3) 雇用環境の変化
- (4) 生徒数と進学率の変化
- (5) 入学者選抜をめぐる変化

(1) 国際化・経済のグローバル化の進展

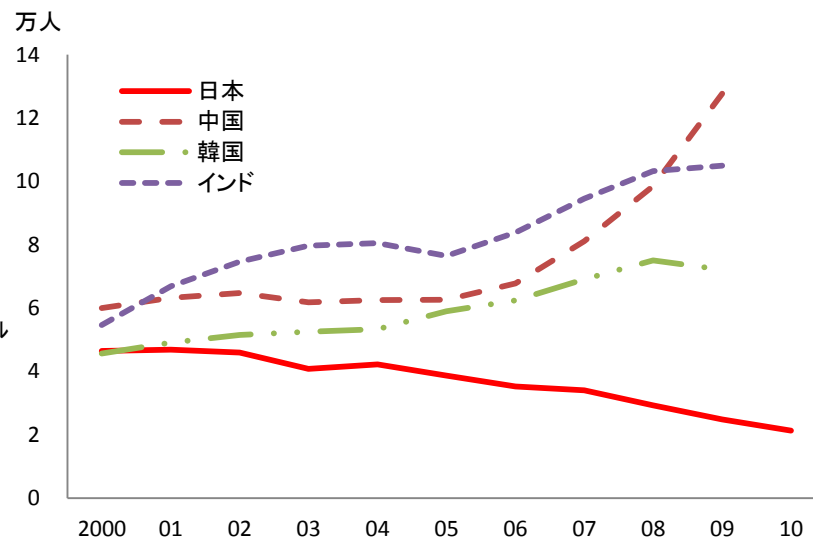
- 国際化・経済のグローバル化が進む中、世界経済における日本の地位が低下。
(90年代前半には1位であった日本の国際競争力が現在では20位前後に転落)
- アジア各国の若者が海外へ活動の場を広げる中、我が国の若者は内向き志向。
(アメリカの大学における日本の留学生数: H13の4.7万人⇒H22年の2.2万人)

国際競争力の推移



出典: IMD「World Competitiveness Yearbook」

アメリカの大学における留学生数(アジア)



出典: IIE(Institute of International Education)「Open Doors」

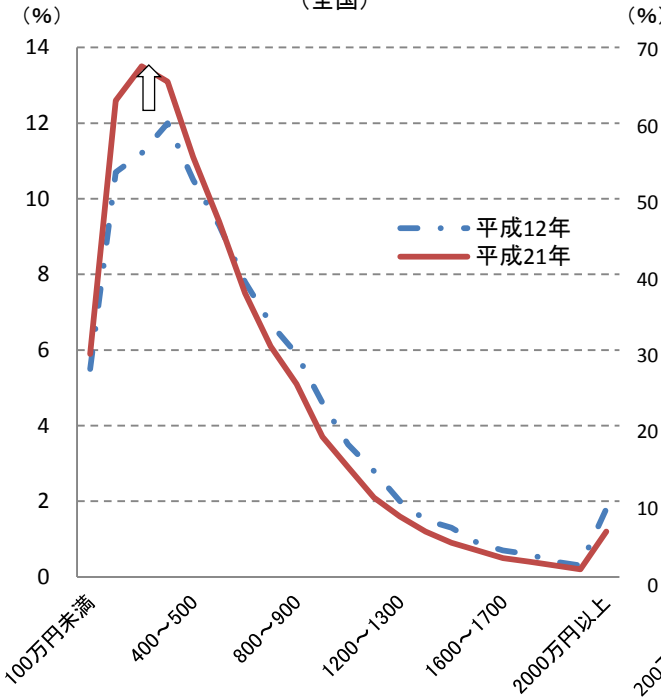
【課題認識 ⇒ 論点】

国際的な競争が激しくなる中において日本が持続的な成長をしていくため、また、日本の若者が力強く生き抜いていくためには、コミュニケーション能力をはじめ、グローバル社会での活躍を視野に入れた知識・能力の育成が必要。

(2) 格差の増大と固定化

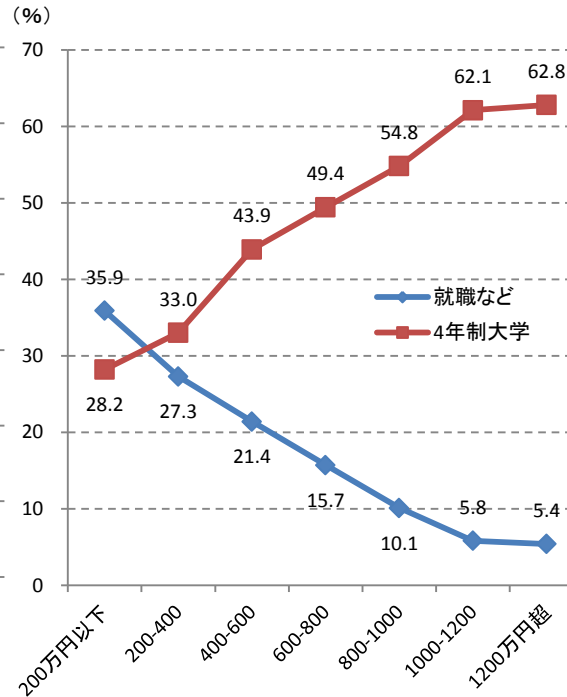
- 中間所得層が減少し低所得層が増加しており、格差の増大とともにその固定化が懸念される。特に大阪においては低所得層の増加が著しい状況。

所得金額階級別にみた世帯数の相対度数分布 (全国)



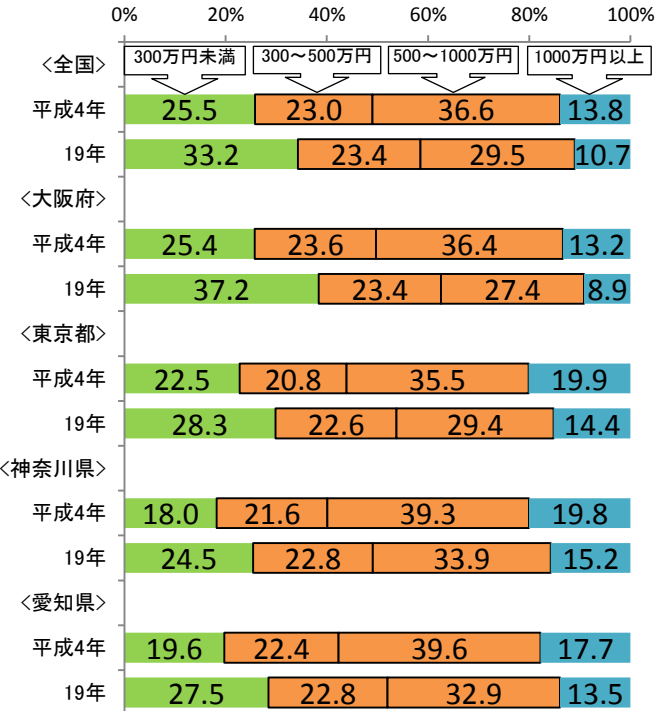
出典：厚生労働省「平成22年国民生活基礎調査」

両親の年収別高校卒業後の進路(全国)



出典：東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター「高校生の進路と親の年収の関連について」(平成21年7月)

所得階層別世帯割合の変化



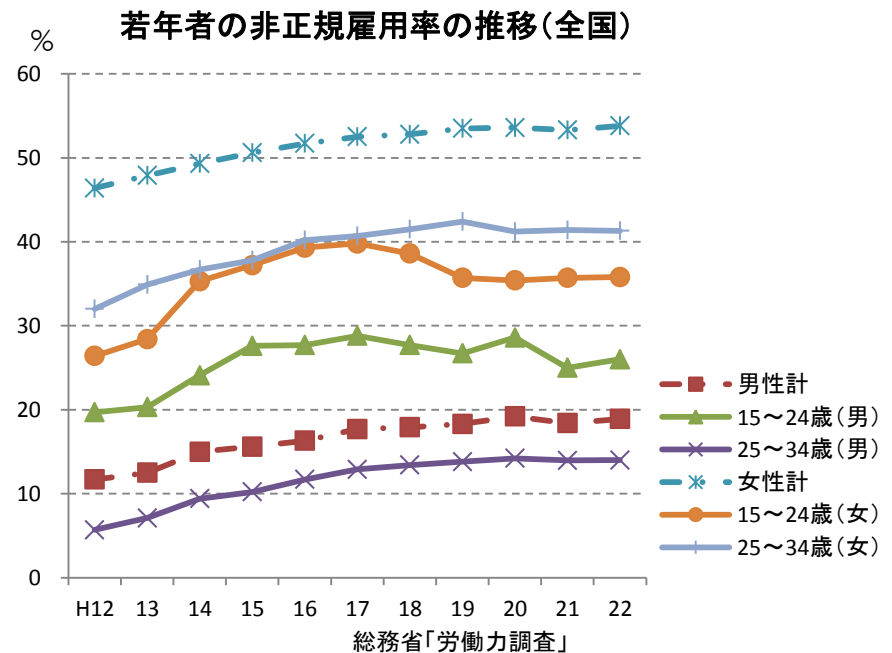
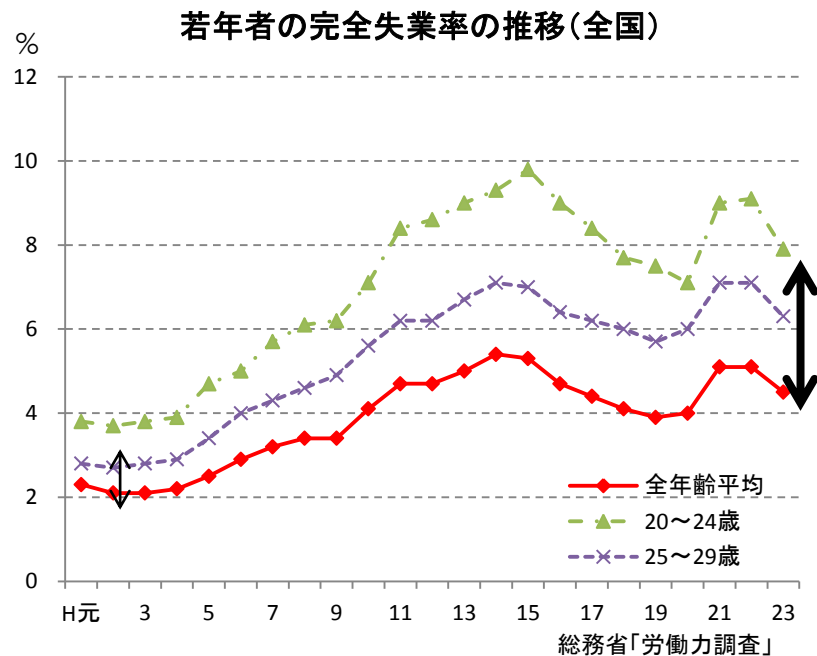
出典：総務省「就業構造基本調査」

【課題認識 ⇒ 論点】

経済的な格差が世代を越えて固定化されることのないよう、すべての子どもに対して学びを支援し、一人ひとりの力を伸ばす教育をさらに発展させることが必要。

(3) 雇用環境の変化

- 雇用情勢が悪化する中、若年者にしわ寄せ。
(H24.3の大阪の高校卒業者の就職率は前年比2.6ポイント増の90.5%だが全国44位)
- 非正規雇用が増加。
(25～34歳の非正規雇用率(H12⇒22)…男:5.7%⇒14.0%/女:32.0%⇒41.3%)

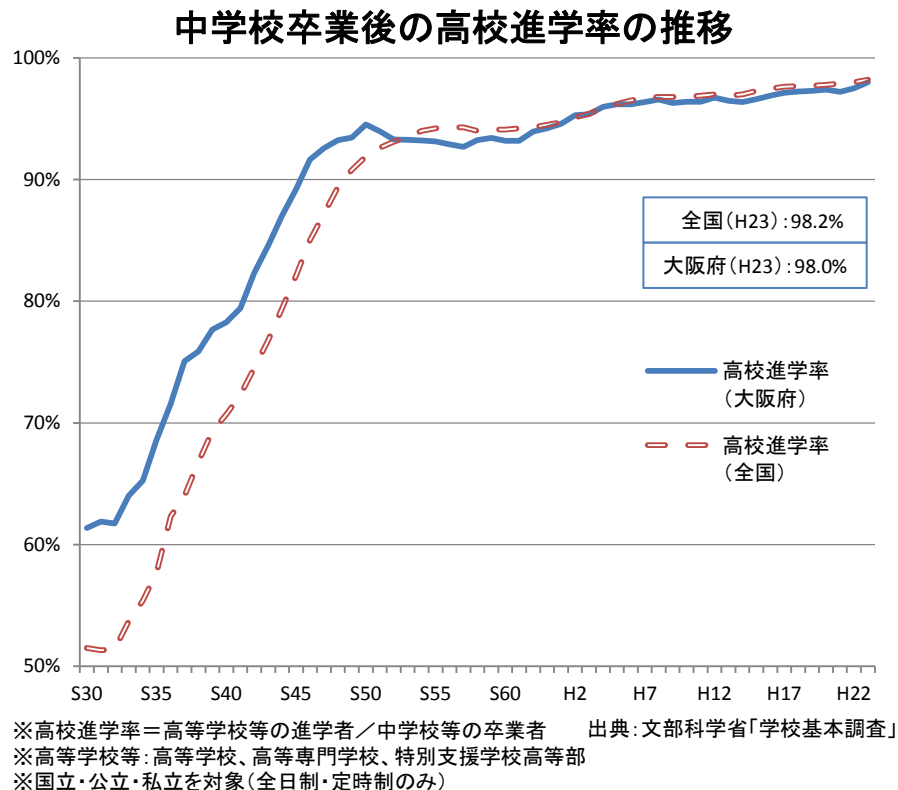
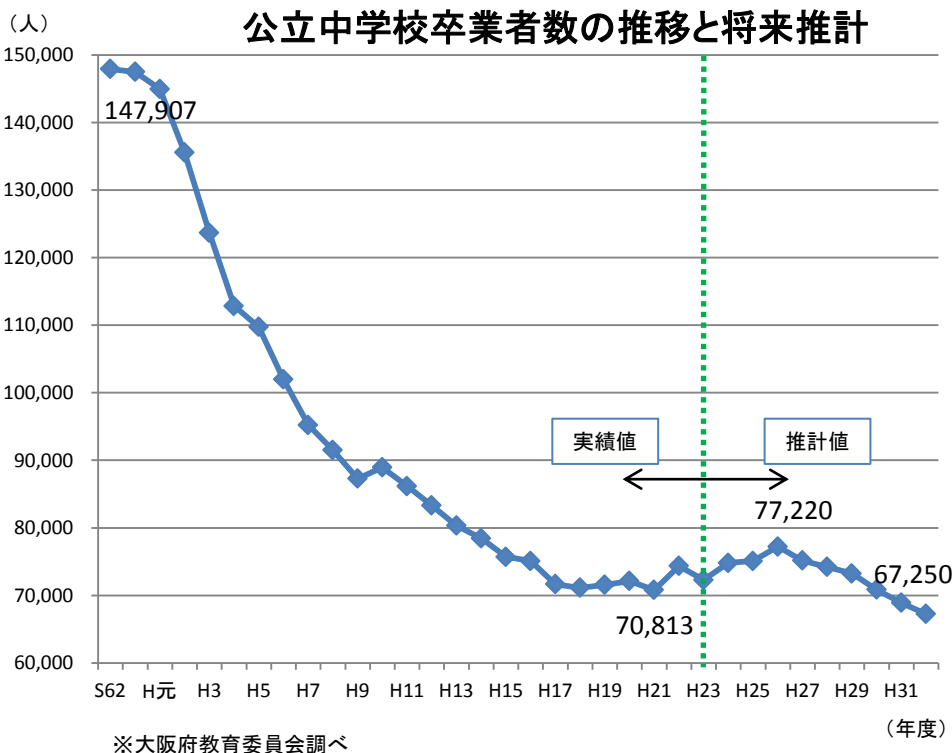


【課題認識 ⇒ 論点】

雇用情勢が悪化し、また、雇用形態が多様化する中、社会の一員として自立して生きていくための豊かな勤労観や職業観を育てることが必要。

(4) 生徒数と進学率の変化

- 生徒数はH26年までいったん増加するが、H30年にはH21年と同程度に戻り、その後も減少する見込み。
- 高校進学率は年々上昇しており、中学校卒業後の進路として大半が進学を選択。



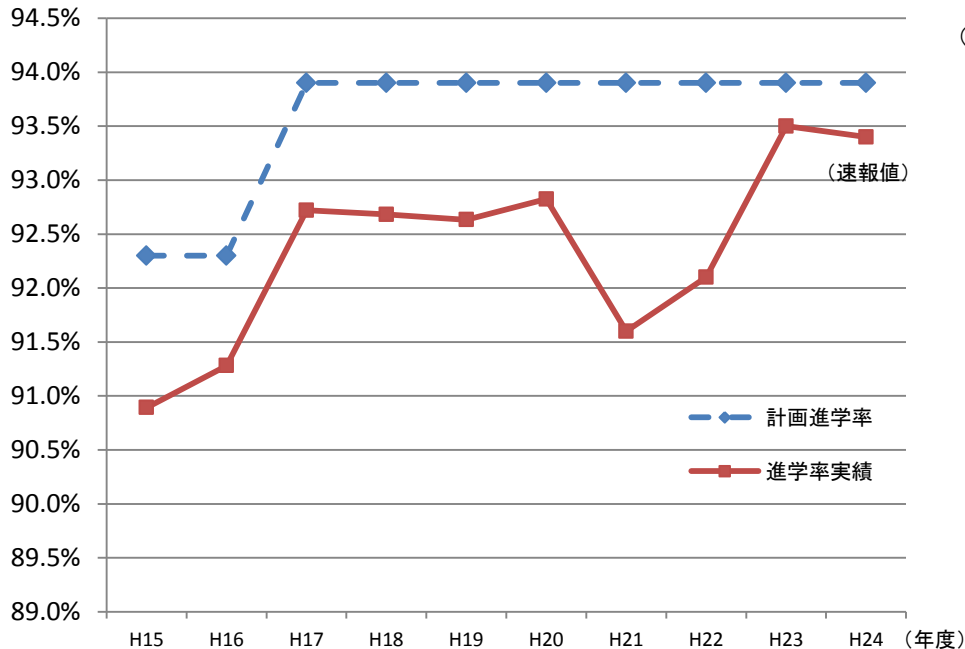
【課題認識 ⇒ 論点】

生徒数減少が見込まれる中で、高校進学を希望する子どもたちの割合は増加しており、適正な配置や規模で高校を設置することが必要。

(5) 入学者選抜をめぐる変化

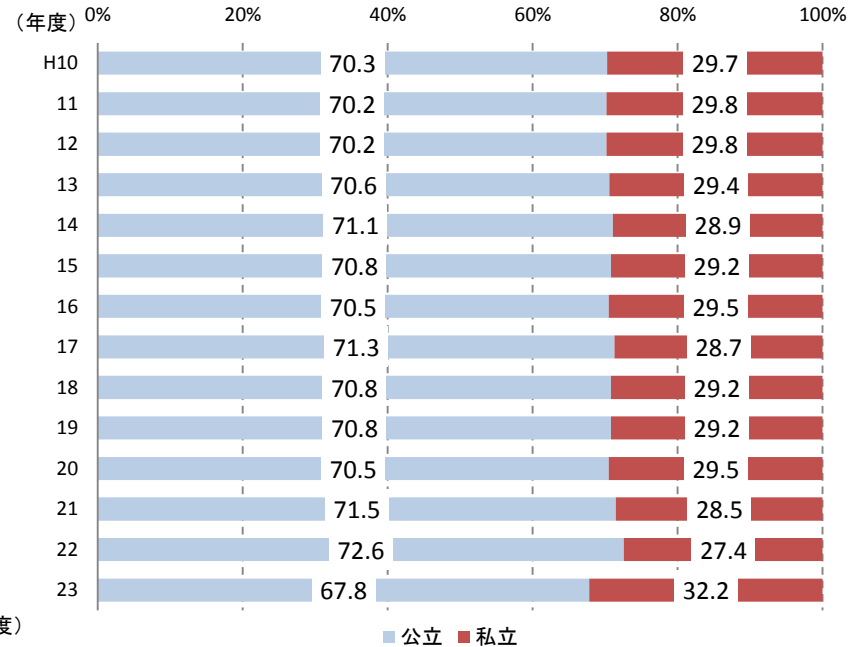
- 進学率は、経済情勢や授業料無償化の拡大等による影響を受けている。
- 公私の受入も同様に変動しているが、依然として7割弱の生徒が公立高校に入学。

昼間の高等学校における
公立中学校卒業者の進学率の推移



※大阪府教育委員会調べ

昼間の高等学校における
公立中学校卒業者の公私の受入実績比率の推移



※大阪府教育委員会調べ

【課題認識 ⇒ 論点】

公私間の流動化が起こる中で、府立高校において、生徒に選ばれる学校づくりにより一層取り組むことが必要。